

エクアドル・アマゾンの自然表象 ——ローカルな生活か、グローバルな保全か？

フランシスコ・ネイラ・ブリト/山本誠・訳

(平成20年3月31日受理 最終原稿平成20年5月20日受理)

【要約】

ここでは先住民と西洋の自然をめぐる文化的な表象をめぐる、エクアドル・アマゾンという地理的コンテキストのもとで学際的な観点から分析を加える。自然の表象に関する社会的、環境的な動態についてはこれまで明確に把握されておらず、それ故この地域の環境管理は非効率で正当性を欠くものになっている。先住民にとって自然とはその本質的な価値をこえるものであり、自然を利用することは彼らの自給的サブシスタンス経済の基礎をなすものである。西洋においては利潤追求の対象として自然を見る視点が支配的であり、同時にそれは自然に本質的な価値を賦与する生命中心主義的アプローチと対立している。この論考はこのふたつの視点間の対話を複雑な状況の中で筋の通った環境政策を策定・実行するプロセスを通じてより深めていくことを目的とする。また、次の核心的な疑問に答えられるような思考の枠組も導入したいと考えている。つまり、アマゾンに暮らす人々にとって、環境への配慮にも敏感なグローバル化というコンテキストにおいて、長期にわたってその自然利用のレベルを維持することは可能だろうかという問題である。

キーワード：自然の表象、学際性、エクアドル・アマゾン、サブシスタンス、自然保全、グローバル化、持続可能性、エクアドル

【Abstract】

Native and western cultural representations of nature are analyzed in a multidisciplinary perspective in the geographic context of the Ecuadorian Amazonia. This social and environmental dynamic has not been clearly understood, and the environmental management is neither efficient nor considered legitimate. For indigenous people nature transcends its intrinsic value and its uses are the basis of their economic subsistence. For Western civilization, a mercantilist vision of nature prevails. This vision is confronted, at the same time, by a biocentric approach that confers certain intrinsic values. The goal of this article is to expand the dialogue between these two visions in the process of designing and executing a coherent environmental policy within the existing complexity. Moreover, some concepts will be brought to answer one key question: Is it possible for Amazonian inhabitants to maintain their levels of natural resource use in a long term period considering globalization within a context of environmental concern?

Keywords: Representation of Nature, Multidisciplinary, Ecuadorian Amazonia, Subsistence, conservation, globalization, sustainability, Ecuador

「自然 (naturaleza)」という言葉は語源的には「何かの誕生」を意味するラテン語の *natura* に由来する。この語源から辞書には2つの定義がおさめられている。まずはあるものごとの内在的な本質をさすという定義、そして2番目には物理的世界、つまり人間の意志を越えて存在し、人為による影響を被っていないものの集合としての物理的世界、これをさすとする定義である。とはいえ、自然という言葉が何を表象しているのかについての解釈、そして自然なるものが妥当な形で利用されているかどうかについての解釈は、異なる文化的環境においてこの言葉がどのように受け止められてきたのか、そのことにかかっている。

サラサル (Salazar, 1993: 37) は文化を次のように定義している。つまり、人間が環境に適応するために利用する物質的な装置、社会的組織やイデオロギーのパターンを含む機能的に関連した要素の集合だというのである。またウェーバーとルベル (Weber y Reveret, 1993) が明言しているところでは、自然の表象とは人間集団それぞれがもつ社会組織の規則や観念的なカテゴリーを環境に対して投影したものである。だとすれば、文化というものは自然に対する感受性や適応の仕方、生態系の操作に絡む実践、自然の利用や消費についての文化的実践など、様々な領域において多様な民族固有のスタイルを生みだしていくものだとということになる (Leff 2003:188)。ここでの議論で念頭におかれるのも、このような意味での自然表象である。

エクアドルのアマゾン地域では土着の先住民文化と西洋文化が共存しており、自然の表象についてもその事情は同様である。両者の自然表象をめぐる社会的、環境的な動態についてはこれまで明確に把握されておらず、それ故この地域の環境管理は非効率で正当性を欠くものになっている。先住民にとって自然とはその本質的価値をこえるものであり、自然を利用することは彼らの自給的サブシスタンス経済 (subsistencia) の基礎をなすものである。西洋においては利潤追求の対象として自然を見る視点が支配的であり、同時にそれは自然に本質的な価値を賦与する生命中心主義的 (biocentrista) アプローチと対立している。ここでの考察は、このふたつの文化の対話を、複雑な状況の中で筋の通った環境政策を策定・実行するプロセスを通じてより深化させていくことを目的とする。また、次の核心的な疑問に応えられるような思考の枠組も導入したいと考えている。つまり、アマゾンに暮らす人々にとって、環境への配慮にも敏感なグローバル化というコンテクストにおいて、長期にわたってその自然利用のレベルを維持することは可能だろうかという問題である。

まず、先住民文化という言葉で理解されているもの、そして西洋文化の特徴として理解されているものを特定することからはじめたい。モレノによれば (Moreno, 1996:26)、ラテンアメリカの先住民文化が存続してきた根拠としてあげられるのは、灌漑農業の発展や土地の共同所有にもとづく自足的な共同体イデオロギー、さらに余剰生産物を求める国家が全体の利益にかなう公共事業を組織して指導したことなどである。一方、西洋文化については、スピルボーゲル (Spielvogel, 1998) によればその歴史の大部分はヨーロッパで発展したものであり、そのヨーロッパの拡大は世界各地で西洋文化の萌芽にあたるものを植え付けていったという。その進展ぶりに決定的な役割を果たしたのは科学である。ルネッサンス以来、科学は宇宙の物質的な理解へと西洋文化を導き、スピリチュアルな領域の存在に向かう信仰から離脱させてしまった。

また個人主義が卓越した重要性を獲得したことも、科学と同様に西洋文化の発展において決定的なことであった。

【日々のパンとしての自然】

人類が最初にアマゾンに到達したのは紀元前1万2千年頃のことである (Morán, 1993:125)。その子孫たちは「慣習的占有者 (habitantes consuetudinarios)」とみなされており、エクアドル・アマゾンでは以下の先住民が (nacionalidades indígenas) それにあたる存在である。つまりキチュア (Quichua)、シュアール (Shuar)、アチュアール (Achuar)、ワオラニ (Huarani)、コファン (Cofán)、シオナ (Siona)、セコヤ (Secoya)、シウィアール (Shiwiar)、それにサパロ (Zápara) といった9集団であり、その総人口は16万8202人にのぼる (Ministerio del Ambiente *et al.*, 2001:9)。国家森林局 (Dirección Nacional Forestal) によれば、この地域にはおよそ920万ヘクタールの自然林が存在する。エクアドルにおける森林破壊は年率0,5%から2,4%の間であることからすると、年間で4万6千から22万800ヘクタールの森が消失していることになる。

この森の消失は「現存する森の完全な消滅と土地利用方法の代替」として定義される森林破壊 (deforestación) に帰せられるものだが (Palo y Salmi, 1987:55)、アマゾン地域におけるその原因は多様である。ここでは先住民のサブシスタンス目的の利用に対応する原因、さらにそういった利用の持続可能性についても分析してみたい。ここでサブシスタンスとは、主として自らが生産したものを消費するような生産システムのことだとしておこう。サブシスタンス生産というのは生産の単位が小さく、多様な食糧を生産、または収集し、交換の主たるメカニズムは互酬性であるような人間集団を特徴とするものである (Morán, 1993:278)。

アマゾン先住民たちにとって自然資源の利用目的としては主要なものがふたつある。薪の調達と耕作可能な土地の確保である。一般的に、薪は発展途上国すべてにおいて重要なエネルギー源でありつづけているといえる。スマウトによれば (2001:144)、薪は家庭での消費用であり家族内での採集活動によるものなので、その利用を定量化するのは非常に困難ではあるが、エクアドルでは薪が先住民の森林利用の67%を占め、年間では850万立方メートルの量になるという。とはいえ、おおむね伐採が選択的であるため、薪の採集が森林破壊の重要な原因だと判明しているわけではない (Wunder, 1996)。さらにいえば、ファルコニが示しているように (Falconi, 2002:100) エクアドルでは基本的なエネルギー生産という点で薪の占める割合は1970年から1997年の間に75%から5%にまで減少しているのである。つまり、このようなサブシスタンス活動は森林の利用という点で比較的重要な活動ではあるものの、だからといって森林破壊の原因だとして考えることはできないということだ。

薪の調達という問題よりも、伐採と火入れによって森が焼畑用の耕地に変わっていくこと、それもととりわけ貧農たちの手によってなされる変化の方がはるかに破壊的だとも考えられている。スマウトによると (Smouts, 2001:146)、そういう焼畑方式がとられているのは、他のあらゆる耕作方法よりも労働コストの点で優れていればこそのことだという。そしてこのタイプの農法で中心になっているのはユカイモ栽培である。ユカイモ栽培は投入カロリーあたりの生産で

考えると圧倒的な量のエネルギーを得ることができる。その効率のよさは畑の規模が小さいことによっている。畑が小規模であるが故に丁寧な伐採が可能となり、その後の火入れで栽培植物と競合する植物を除去し、あわせて灰の養分でその区画の土壌を豊かにしてエネルギー効率を上げているのである (Morán, 1993:181)。

ネイラたちはサブシスタンス的な農業による森林消失に関して、リモンコーチャ生物保護区の緩衝地帯では年率0,82%だと見積もっている (Neira *et al.*, 2006)。そしてこの地域はユカが最もよく消費されている作物である。この根菜の平均的な耕作面積は1人あたり0,5ヘクタール、それで年間あたり1907キロのユカが得られる。こういったデータから、ユカ栽培の生産性はエネルギー換算で年間ヘクタールあたり257万5212,8カロリー (1日あたり7055カロリー) だとネイラらは評価している。一方、サブシスタンス的な農業労働に投入される人的なエネルギーを考えると、マルチネス・アリエルとシュルプマンの見積もりでは、先住民1人あたり年間で10万カロリーをこの栽培活動につきこんでいるのではないかとされる (Martínez Alier y Schlüpmann, 1991:48)。リモンコーチャに暮らすキチュア系先住民が取り組むのはユカ栽培だけだとして、さらに彼らがこのように骨身をおしまず働くとする、労働生産性という点でこの地域のユカ栽培におけるエネルギー効率は非常に重要な意味をもっているようにみえる。

こういった森林利用の主要な方法2つに加えて、アマゾンの自然はその住人に対して無数の有用物をもたらしており、その中には生存に欠かせないものも含まれている。ワオラニのテリトリー内にある実験区画において、マシアたちは (Macía *et al.*, 2001:230) 1094種にのぼる樹木・ツル植物を数え上げているが、その87%は有用なものであったという。その中のおよそ3分の1が食用として利用されており、約15%が薬草として、あるいは家庭用もしくは文化的な目的をもつ道具の加工・制作のために利用されていた。また他方では、狩猟と漁労もアマゾンの森に暮らす先住民にとってサブシスタンス的手段のひとつである。少なくとも熱帯に位置する62の国々では、その種の活動によって日々の食事における動物性タンパクの約20% (Redford, 1993)、カロリーの14% (Alvard, 1993) がまかなわれているのである。

ラテンアメリカでは10をこえる先住民民族について「森の肉 (“carne de monte”)」由来のタンパク摂取量の平均が1日あたり1人59,6グラムにのぼることが明らかにされている (Bennett y Robinson, 2001:1)。エクアドルでもリモンコーチャ生物保護区の緩衝地帯に暮らすキチュア系先住民のコミュニティでは、消費する肉の大部分は狩猟により獲得されたものである (Neira *et al.*, 2006)。ネイラらの見積もりによれば (狩られた野生動物の種類と狩猟活動の実行頻度に応じての話だが) 熱心に狩猟を行う者とその家族は週あたり5,2キロにおよぶ「森の肉」を消費できる可能性があり、それは10万140カロリーに匹敵する。その熱量は人間1人の体内エネルギー消費を3日以上にわたって充足させられるだけのものである。さらに同じコミュニティにおける魚肉の平均消費量は週あたり4,54キロであり、カロリー換算では4540カロリーとなる。この熱量も人間1人が1日で必要とする体内エネルギー消費量を十二分に上回るものである。

これに加えて、先のサブシスタンス活動で獲得される作物、エネルギーを合計するなら、リモンコーチャのキチュア系先住民について「自然は彼らに日々のパンを十分な程度まで提供し

ている」と断言してもよいだろう。このような事情は年月を遡っても大きな差はみられない。この時間的な持続性こそ、この論考において設定された問題意識に回答を与えるものではないだろうか。つまり、長期にわたる自然の合理的な利用はサブシスタンス経済というコンテクストにおいて可能だということである。西洋文化的には、この事実は（たとえば森林破壊のパークセンテージなど）喜ばしき持続可能性を示すものに映るかもしれない。しかし、実はそういうことでは必ずしもない。アマゾンの社会環境的な問題系をめぐってまだ検討されていない関係者が残っており、その彼らが自然をどのように扱っているのか、そこに注意を向けていかなければならないように見える。

【保全生物学から自然の生命・文化両面の (biocultural) 保全に】

西洋において、神々の意志から独立した自然界（ギリシャ語の *physis*）という概念はギリシャ古典時代に遡る。この自然に対する感覚が科学の起源を画するものであり、その科学は理性と経験、数学を駆使する体系化された知識として受けとめられた。このように神聖なるものと自然なるものを巧みに分離させたことにより、なんとか科学は中世の恐怖に満ちた宗教的原理主義の感情的反発をしのぐことができたのである。ルネッサンス以降、フランシスコ・ベーコンとルネ・デカルトの影響をうけた科学は自然界を帰納法的に説明する。その帰納法は経験にもとづくものであり、全体は部分の総和だとみなす機械論的なアプローチを背景とするものである（Gingras *et al.*, 1999）。

単純化することなく要約を試みるなら、次のようなことになるだろう。つまり、西洋において自然界の生命作用を明らかにしたパラダイム（枠組）は進化論であり、それは1859年にチャールズ・ダーウィンにより提起され、公にされた。この理論は種の起源、ひいては生命の多様性の起源をうまく説明している。ダーウィンの業績が世に出て100年以上経過した後、レイチェル・カーソンの1962年の著書『沈黙の春』（*Silent Spring*）において産業化された国々の集約農業で使用されていた農薬の問題が告発される。農薬の使用が春の鳥たちの囀りを沈黙させる効果をもたらしたというのである。スタールとタガートの指摘では（Starr y Taggart, 2001:492）、カーソンの業績がアメリカ合衆国における環境運動の嚆矢であり、そこから保全生物学（*biología de conservación*）という分野が誕生し、さらにそれが今日では環境危機に対する科学からの応答のひとつになっているとのことである。マイケル・ソーレは（Michael Soulé, 1985）この保全生物学に対して、それは人間、もしくは他のエージェントの活動により直接、間接に攪乱された種・群集・生態系の動態を研究する総合的な分野だという定義づけを行い、その目的は自然を保存する（*preservar*）ための理論的な原理と管理に向けての道具立てを提供することだと指摘した。こうした環境をめぐる問題系に対する科学的なアプローチに並行して、もっと具体的に自然を効果的に保存しようという努力もなされており、その種の活動は非営利の法人形式をとって運営されている。現在のエクアドルでも、次のようなグローバルな自然保護NGOが活動している。たとえば世界自然保護基金WWF (World Wide Fund for Nature) やコンサベーション・インターナショナルCI (Conservation International)、ザ・ネイチャー・コンサーバション TNC (The

Nature Conservancy)、それに野生生物保全論研究会WCS (Wildlife Conservation Society) などである。

こういった保全主義的なアプローチには、保護された地域で自然を保存し、そこでは人間の活動は制限されるということが含意されている (Martínez Alier y Roca, 2001:233)。この論考での問題に絡めるなら、こういった生命中心主義的な自然表象では、サブシステムの利用すら、自然の保全を危うくするものとみなされてしまうことになる (Shaw, 1997:51)。しかし、そういう視点は先進国における多額の支援をあてにしたものであり、そこに植民地主義的な押しつけという問題が生じてくる可能性もある (Potvin y Seutin, 2001)。さらに、この視点はもうひとつの西洋的な自然表象、つまり利潤追求の対象としての自然表象と対立するものでは必ずしもない、ということも考慮しておく必要がある。この意味においてチャピンは自然保護団体と多国籍企業、とりわけ鉱物 (石油や天然ガス) や製薬分野の多国籍企業との間にはある種の提携・協力関係が成立する可能性があるとして告発している (Chapin, 2004)。鉱物や薬品の開発といえば、先住民の土地だった森林地帯を横取りしてしまったり、持続可能でない形で利用したりすることに直接責任のある活動である。

当然ながら、そこには多くの批判がよせられている。こういうタイプの自然表象には独特の緊張関係が付きまとうことになるのだが、なかでも重要なのは保護区内のコミュニティに暮らす人々の文化、居住地の生物多様性を有効利用する権利としての文化が無視されることであろう (Parizeau, 2001)。たとえば、ある保全主義者がシャーマンとの会話に臨むとしても、それはシャーマンが自然に対して畏敬の念を示していることに関心をもちかぎりのことであつたりする。もともとのコンテクストから乖離した感覚では、ツーリストを受け入れるような保護区を設定して、シャーマンが仕事を続ける上で妨げとなるような結果を生んでしまうことにもなりかねない。そんなことは倫理的に許容できるものではないだろう。このような背景のもとで、自然保護プロジェクトの目的をどう捉えるか、保全主義者とローカルなコミュニティとの間に意見の対立が生じているのである。前者は基本的に科学的な立場からの問題回答を特権化しており、後者は自然をめぐるサブシステムの利用に関係した諸問題に対する回答を求めているということだ (Weeks *et al.*, 2001)。

この生命中心主義に対する批判は産業化された世界からも数多くよせられており、その矛先は意外にも同じ方向に向けられている。ワールドウォッチ研究所のチャピンはその影響力のある論考の中で (Chapin, 2004) 国際的な自然保護団体 (世界自然保護基金WWF、コンサベーション・インターナショナルCI、ザ・ネイチャー・コンサーバンス TNC) をやり玉にあげて告発している。この名誉ある3団体がどれだけその事業計画や金融資源を大規模な自然保全戦略や科学的な保全主義の展望を切り開くことに集中させてきたか、そこでは先住民たちが直面している社会的現実が棚上げされているのではないかというのである。またチャピンが明確に述べているように、保全主義者は (彼らには理解不可能なわけだが) 自然資源を保存するよりもコミュニティ全体の豊かさの充足を選択する先住民たちを妥当な連帯相手とはみなしていない。

こういった先住民の社会環境的現実から遊離した保全主義の立場はレッドフォードの論考

(Redford, 1991)などにその具体的な姿を見ることができる。レッドフォードは古生物学や考古学、植物学からの証拠を解釈して、新大陸アンデスの熱帯森はヨーロッパとの接触以前から人間の活動によって深刻な影響を受け続けてきたのではないかと主張している。とはいえ、そういった解釈の結論というのは、土着の文化は本来的に自然を保全するようなものではなく、自然の合理的な管理は土着の知恵を「考慮しながらも (“considerando”）」やはり西洋の科学にもとづくものでなければならないというものである。またアルバードは (Alvard, 1993) この視点をより深化させ、自然を前にした先住民は短い時間で食糧獲得を最大化する最適化モデル (最適採餌理論) にもとづく行動をとっていると主張する。どういふものであれ先住民が自然を保全するような行動をとるとしても、この最適採餌理論の観点から解釈されるべきだということである。この理論にしたがえば、持続可能性が高まるのは食糧獲得率の最大化という点でコストのかかる決定をした場合だということになる。

要約していうと、長期にわたる人間の自然利用について、たとえサブシスタンス的な目的をもったものであっても、生命中心主義はそこに持続可能性を見ていないということである。とはいいながらも、現地のコミュニティの生活の質を改善するようなタイプの自然の保全、つまり先祖代々からの知恵を最重要なものとしてとらえ、先住民ひとりひとりを決定論的な将棋の駒のごとき存在としてとらえることのない保全の理念が西洋世界でも支持者を広げているのである——「発展途上 (“en desarrollo”）」の世界だけではなく「発展ずみの (“desarrollado”）」世界でも。

「人間のコミュニティとそれ以外の生物種のコミュニティ、両者の充足は相補的で敵対するものではない。生物的、文化的な多様性は分かちがたく一体化している。ラテンアメリカに広がる素晴らしき生態系と文化システム、これを調査し、記述し、理解するだけでは十分ではない。次のことが必要だし、またそれは急を要することでもある。つまり、知的な世界でも物理的な空間においても、我々の社会の多様な人々が生命・文化両面にわたる保全活動に参加するよう応分の責任をもって促すこと、そしてアメリカ大陸、ひいてはこの惑星に暮らす人間や他の生物種たちについて、その多面的で変化に富む生命史の継続を可能ならしめることである (Primack, *et al.*, 2001)。」

【ローカルなサブシスタンスとグローバル化された世界における生命・文化の保全】

窮地に追い込まれた自然について産業化された西洋世界で想像されているイメージというのは、宇宙船地球号に迫る危険、つまり地球上のあらゆる生命体を乗せて宇宙空間を旅する宇宙船に迫る危険というものだ。しかし、ベラスコの見解では (Velasco, 2004:52) その宇宙船地球号のセキュリティは一群のエリート的手中にあり、そこでは文化的な意味を担った生活の質など二次的なものとされ、持続可能性という定型化された教義をもとにグローバルな環境管理が行われている。持続可能な自然の利用とは、現在世代の必要性を満たすと同時に、未来世代が同じふるまいをすることを妨げないような自然利用のありかたである (CMMAD, 1987)。

ここまでの学際的な分析でみてきたように、長期にわたる (持続可能な) 自然の利用は、サ

ブシタンス的なものの場合には可能である。このことをさらに明確にするには、実際にグローバルな科学的アプローチが規定するところにしたがい、西洋近代農業のエネルギー効率に関する生物物理的な分析例を少し検討してみればよい。たとえば北米のアメリカ合衆国におけるトウモロコシ栽培の場合、年間の投入エネルギーはヘクタールあたり700万カロリーにものほる。しかし獲得されるエネルギーはヘクタールあたり1800万5千カロリーでしかない (Martínez Alier y Schlüpmann, 1991:43)。その一方、これまで見てきたように先住民文化のサブシタンス的な生産システムにおけるエネルギー効率は非常に優れており、結果的に持続可能性をもっている (Martínez Alier y Roca, 2001:36)。

ここで、あらためて問題を提起しておきたい。エクアドル・アマゾンにおいて懸念されている森林破壊率、これはどのように説明すればよいのだろうか。ブンダーの見解では (Wunder, 2004:260) 森林破壊の原因は石油関係者のふるまいにあり、それは開発にとまなう直接的な森林伐採だけではなく、原生林をアクセス可能な地域に変え、農業用の入植を呼び込むような間接的な効果も問題だということである。フォンテーヌの指摘するところでは (Fontaine, 2004:171)、石油採掘の主たる現場はアマゾン地域にあたるスクンビオス県やオレリヤナ県、パスタサ県であり、そこで環境をめぐる経済的、政治的、社会的、そして倫理的な軋轢が生じている。その軋轢はとりわけ先住民コミュニティ、現地で操業している石油関連会社、エクアドル国家の間でのことである。そこで推測できるのは、西洋流に利潤追求を目的として行われる外部エージェントによる森林破壊こそ、アマゾンの生態系を持続不可能にさせている元凶ではないかということだ。さらにいうならば、その持続不可能性はとりわけ現地に暮らす先住民コミュニティのライフ・スタイルにも影響を与えてしまうような持続不可能性である。

しかしながら、この最後の問題について、生命中心主義は次のような抽象的一般論で応えようとするのかもしれない。自然の状態を悪化させているのはすべて人間の利用だということである。しかし、それは幻想にすぎない。確かに、とりわけ資源収奪的な巨大プロジェクトとかアマゾンの自然を利潤追求の対象として利用したりするような場合であれば、その自然状態の悪化に人間の責任がでてこよう。しかしサブシタンス的な利用には、本来の条件のもとでなら持続可能性がともなっているはずである。したがって、レフが主張するように (Leff, 2003:189) 「文化を先住民が伝承してきたリソース、その不可欠な部分として定義する必要がある、そして持続可能な開発という戦略に向けて彼らの資源利用をめぐる文化的実践をとりこんでいく必要がある」。こうした全体論的なヴィジョンを具体化させていくことは社会学者、自然科学者双方にとっての挑戦的な課題であり、またそのことは先住民たちにとっても事情は同じである。

結論的にいえば、自然の保全という理念、持続可能な利用という理想は、ひとつの文化、あるいは特定されたひとつの科学分野の知的財産というわけではない。北米ではその土着の文化は先コロンブス期中南米諸文化が実現していた文明の段階には到達していなかった。ことによると、このことは先祖伝来の知恵を無視したり過小評価したりする (タイプの) 保全主義的アプローチを少なくとも部分的には説明しているのかもしれない。一方、学際的なアプローチ

は、たとえば生物学者に対して次のような恥ずべき推定を——生物多様性の消失は自然資源のサブシステムの利用が唯一の原因であり、社会環境的な問題複合を抱えた他の関係者たちの利用がもたらす直接、間接的な影響については過小評価するという杜撰な推定を——回避させるような効果をもつものであろう。それ故、生命、文化両面の保全を旨とする学際的アプローチこそが、先住民コミュニティにおける（生活の質を向上させるという意味での）ローカルな開発の必要性とあらゆる生物種の生きる権利を考慮に入れたうえで、サブシステム経済的で持続可能な自然の利用法をエクアドル・アマゾンの地で担保するような環境管理、そのような方向に向かって政策形成を促していけるものなのである。

【参考文献】

- Alvard, Michael, 1993, "Testing the ecologically noble savage hypothesis: Interspecific prey choice by Piro hunters of Amazonian Peru" *Human Ecology* No. 4, Vol. 21.
- Bennett, Elizabeth y John Robinson, 2001, *Hunting of wildlife in tropical forests: Implications for biodiversity and forests peoples*, The World Bank, Washington D.C.
- CMMAD (Comisión Mundial para el Medio Ambiente y el Desarrollo), 1987, *Nuestro futuro común*, Alianza, Madrid.
- Chapin, Mac, 2004, "A challenge to conservationists" en *World Watch Magazine*, November/December 2004.
- Falconi, Fander, 2002, *Economía y desarrollo sostenible ¿Matrimonio feliz o divorcio anunciado? El caso de Ecuador*, FLACSO Ecuador. Quito.
- Fontaine, Guillaume, 2004, "Actores y lógicas racionales en los conflictos socioambientales. El caso del bloque 10 en Ecuador (Pastaza)", en Fander Falconi, Marcelo Hercowitz y Roldán Muradián, editores, *Globalización y desarrollo en América Latina*, FLACSO - Ecuador, Quito.
- Gingras, Yves, Peter Keating y Camille Limoges, 1999, *Du scribe au savant*, Les éditions du boréal, Montréal.
- Leff, Enrique, 2003, *Ecología y Capital: Racionalidad ambiental, democracia participativa y desarrollo sustentable*, Siglo Veintiuno Editores, México.
- Macía, Manuel, Hugo Romero y Renato Valencia, 2001. "Patrones de uso en un bosque primario de la Amazonía ecuatoriana: comparación entre dos comunidades Huaorani", en Joost Duivenvoorden, Henrik Balslev, Jaime Cavelier, César Grandez, Hanna Tuomisto y Renato Valencia, editores, *Evaluación de recursos vegetales no maderables en la Amazonía noroccidental*, IBED, Universiteit van Amsterdam, Amsterdam.
- Martínez Alier, Joan y Klaus Schlüpman, 1991, *La ecología y la economía*, Fondo de Cultura Económica, México.
- Martínez Alier Joan y Jordi Roca, 2001, *Economía ecológica y política ambiental*, Fondo de Cultura Económica, México.
- Ministerio del Ambiente, Ecociencia y Unión Mundial para la Naturaleza, 2001, *La biodiversidad del Ecuador: Informe 2000*, editado por Carmen Josse, Ministerio del Ambiente, Ecociencia y Unión Mundial para la Naturaleza, Quito.
- Morán, Emilio, 1993, *La ecología humana de los pueblos de la Amazonía*, Fondo de Cultura Económica, México.
- Moreno, Segundo, 1996, "El proceso histórico en la época aborígen: notas introductorias" en Enrique Ayala, editor, *Nueva historia del Ecuador: Volumen uno, Época Aborígen I*, Corporación Editora Nacional, Quito.
- Neira, Francisco, Santiago Gómez y Gloria Pérez, 2006, "Sostenibilidad de los usos de subsistencia de la biodiversidad en un área protegida de la Amazonía ecuatoriana: un análisis biofísico" *Ecuador Debate*, No. 67, CAAP-Ecuador,

- Quito.
- Palo, Mati y Jyrki Salmi, 1987, *Deforestation or development in the third world*, Finnish Forest Research Institute, Helsinki.
- Parizeau, Marie-Hélène, 2001, "Considerations on a code of ethics for conservation biologists" *Protecting biological diversity roles and responsibilities*, Catherine Potvin, Margaret Kraenzel y Gilles Seutin, editores, McGill-Queen' University Press, Montreal.
- Potvin, Catherine y Gilles Seutin, 2001, "Introduction" , en *Protecting biological diversity roles and responsibilities*, Catherine Potvin, Margaret Kraenzel y Gilles Seutin, editores, McGill-Queen'University Press, Montreal.
- Primack, Richard, Ricardo Rozzi, Peter Feisinger, Rodolfo Dirzo y Francisca Massardo, 2001, *Fundamentos de conservación biológica: perspectivas latinoamericanas*, Fondo de Cultura Económica, México.
- Redford, Kent, 1991, "The ecologically noble savage" *Cultural Survival Quarterly*, vol.15, no 1.
- Redford, Kent, 1993, "Hunting in Neotropical forests: A subsidy from nature" *Tropical forest, people and food biocultural interactions and applications to development*, Man in the biosphere series, Vol. 13, UNESCO.
- Salazar, Ernesto, 1996, "El proceso cultural en el Ecuador aborigen y en América" Enrique Ayala, editor, *Nueva Historia del Ecuador: Volumen uno, Época Aborigen 1*, Corporación Editora Nacional, Quito.
- Shaw, James, 1997, "Probabilidades de vida silvestre sostenible en América Latina" John Robinson y Kent Redford, compiladores, *Uso y conservación de la vida silvestre neotropical*, Fondo de Cultura Económica, México.
- Smouts, Marie-Claude, 2001, *Forêts tropicales jungle internationale, les revers d' une écopolitique mondiale*, Presses de Sciences Po, Paris.
- Soulé, Michael, 1985, "What is Conservation Biology?" *BioScience*, vol. 35, no 11, p. 727-734.
- Spielvogel, Jackson, 1998, *Civilizaciones de Occidente*, International Thompson Editores, México.
- Starr, Cecie y Ralph Taggart, 2001, *Biology: the unity and diversity of life 9th edition*. Brooks/Cole Thomson Learning, USA.
- Velasco, Francisco, 2004, "Globalización, desarrollo sustentable e identidad cultural" Hercowitz y Roldán Muradián, editores, *Globalización y desarrollo en América Latina*, FLACSO-Ecuador, Quito.
- Weber, Jaques y Jean-Pierre Revéret, 1993, "les leures de la privatisation" en *Le monde diplomatique collection Savoirs*, No 2, Le monde diplomatique, Paris, p. 71-73.
- Weeks, Priscilla, Jane Packard y Mirella Martínez, 2001, "Cultural lens and conservation biology collaboration in tropical countries" , en Catherine Potvin, Margaret Kraenzel y Gilles Seutin, editores, *Protecting biological diversity roles and responsibilities*, McGill-Queen'Press, Montreal.
- Wunder, Sven, 1996, *Los caminos de la madera*, Programa Regional Bosques Nativos Andinos (PROBONA), Quito.
- Wunder, Sven, 2004, "Petróleo, macroeconomía y bosques" en Fander Falconí y Julio Oleas, compiladores, *Economía Ecuatoriana*, FLACSO-Ecuador, Quito.

原題：Representaciones de la naturaleza en la Amazonía ecuatoriana: ¿subsistencia local o conservación global?

原著者：Francisco Neira Brito (Profesor e Investigador de la Facultad de Ciencias Ambientales de la Universidad Internacional SEKEcuador,
Email: neira.francisco@courrier.uqam.ca

出典：Iconos. Revista de Ciencias Sociales. [en línea] 2006, (025) pp.57-65. <http://redalyc.uaemex.mx/redalyc/src/inicio/ArtPdfRed.jsp?iCve=50902506> ISSN 1390-1249